

二〇一四年二月二日

花柄の好みを選びて日記買ふ
冬帽を叩き香煙しみこます
煤払ふ巫女は緋袴 青袴
息災の余生を感謝 冬銀河
おでん屋の鍋蓋とればわつと湯気

二〇一四年二月一日

冬籠郵便受けを覗くだけ
名匠の目視確かや紙を漉く
着膨れてシートベルトに押さへられ
ありがたきご講話聴くも隙間風
しぐるるや翁反古塚訪へば

二〇一四年二月一〇日

冬帽子おしゃれに被る好々爺
吾が庭は猫の通ひ路 漱石忌
ゆりかもめ音符にとまる斜張橋
跡継ぎの覚悟の鋭目や紙を漉く

二〇一四年二月九日

キッチンに居間にメモ書き師走妻
沢庵漬石に重さの書かれあり
喋りたくなき人と会ふマスクかな

満天

なつき

三刀

宏虎

ともえ

あさこ

かかし

つくし

宏虎

菜々

よう子

治男

菜々

かかし

菜々

なつき

うつぎ

温めて看取り戻りの一人鍋

冬かもめ一湾花のごとく舞ふ

海風を受けて細りし雪ダルマ

二〇一四年二月八日

梵僧の師走行脚の列長し
全容を池に映して紅葉山
冬野菜あれこれ詰めて娘に送る
母の手を引きて紅葉の嵐山
群千鳥沖の潮目にまぎれけり

二〇一四年二月七日

短日の足より暮るる立ち話
白桃のごとき日輪雪もよい
船頭の舟唄もよし炬燵舟

二〇一四年二月六日

フレームの戸を開けしより香にむせる
母縫ひしねんねこ躰糸のまま
うず高く雪積む里は無音界
電飾におとぎの国よ冬木立

はく子

よし女

こすもす

あさこ

せいじ

三刀

せいじ

よし女

なつき

ひさ野

宏虎

かず

よし女

ひさ野

菜々

毎日句会みのる選・二〇一四年二月一四日